

スピノザの反「共感論」

ニューロサイエンスで『エチカ』を読む

柴田 健志

この論文は関西哲学会第70回大会（二〇一七年、大阪体育大学）での口頭発表に加筆および修正を施し、注を付したものである。題目は発表時のものと同一である。口頭発表にもとづくという経緯を考慮して文体は口語調で統一した。

はじめに

人間には他者と「共感」する能力があります。他者を援助するという行為はこの能力にもとづいていると考えられています。それゆえ「共感」する能力の有無は社会的に重要なものです。実際、心理学においては、反社会的な行為が他者に対する「共感」の欠如に起因する可能性 (Baum 1996) や、幼児における「共感」の形成がその後の道徳的発達に及ぼす影響 (Hoffman 2000) 等がすでに研究されています。ところがスピノザは「共感」がなくても人間は他者を援助することができるといっています。スピノザが提案するのは「理性」による他者の援助です。また、スピノザは「共感」よりも「理性」による援助の方がすぐれているといっ

ています。「共感」とは外部からの刺激によって発生する「受動感情」にすぎないからです。現代の心理学的な視点からすると、スピノザの主張は実効性のない内容空疎な主張であるかに見えます。ところが、最近5年ほどのあいだにニューロサイエンスによってなされた「共感」についての実証研究は、むしろスピノザの主張を支持するものであると考えられます。そこで、この視点からスピノザの主張を見直し、その倫理的意味についてあらためて考察してみたいと思います。

1 共感と理性

スピノザの用語で「憐れみ(commiseratio)」（Eth.III.22.Sch.）と呼ばれている感情があります。それは他者の「悲しみ」が「模倣」されることから生じる「悲しみ」の感情であると説明されています。他者の感じている「悲しみ」を自分も感じることで「憐れみ」の感情が生じるというわけです。これはまさしく現代の用語で「共感(empathy)」と呼ばれる感情のことです (Maiborn 2014)。スピノザによれば「憐れみ」を生み出すのは「感情の模倣」(Eth.III.27.Sch.) です。では他者の感情はいったいどんなふうにして「模倣」されるのでしょうか。スピノザは「表象」を生み出す一般的な原理の特殊事例として「模倣」という現象を説明しています。それはだいたい次のような説明です。

人間身体はつねに外部の物体によって刺激され、その結果として「変容」を被っている (Eth.II.3.Dem.)。人間は身体の「変容」の観念をとおして自己の身体を現実存在するものとして認識している (Eth.II.19.Pr.)。ところが、身体の「変容」には身体の本性とともな身体の「変容」

を引き起こした外部の物体の本性が含まれる (Eth.II.16Pr.) がゆえに、人間は「変容」の観念によって外部の物体をも現実存在するものとして認識している (Eth.II.26Pr.)。スピノザはこの一般的な原理を前提したうえで、身体を刺激する外部の物体が「人間身体」である場合には次のような特殊な事情が生じるという形で「感情の模倣」を説明しています。

「もし外部の物体の本性がわれわれの身体の本性に類似するなら、われわれが表象する外部の物体の観念は、外部の物体の変容に類似したわれわれの身体の変容を含むであろう」 (Eth.III.27Dem. 傍線引用者)。他者の身体は自己の身体に「類似」しているため、他者の身体から刺激を受ける場合には通常の「変容」とは違ったことが起こるとというのがポイントです。他者の身体に生じている「変容」と類似の「変容」が自己の身体にも生じるからです。だから他者の「悲しみ」から刺激を受けると、自分が「悲しみ」を感じるときの状態が生じるわけです。「憐れみ」はここからもたらされると考えられます。「感情の模倣」によって自分が生じた「悲しみ」をともなつて他者の「悲しみ」が表象されることからもたらされるのが「憐れみ」であると。スピノザの論理は現代のニューロサイエンスが主張する論理と同じです。自分が苦痛を感じるときに活性化する大脳ネットワークは、他者の苦痛に「共感」したときにも活性化していることが発見されているからです (De Vignemont&Singer 2006)。この発見は1990年代後半からひろがった「シラーシステム」の研究においてすでに予想されていたものです (Gallese 2002)。

ところで、「憐れみ」からは他者を援助しようとする欲望が生じると考えられます。スピノザはそれを「慈悲(benevolentia)」 (Eth.III.22

Cor.) と呼びます。「共感」には道徳的行為の動機づけという性質が認められているわけです。ところがスピノザは「憐れみ」にもとづいて他者を援助するという行為を否定的に見ています。「容易に憐れみの感情にとらえられ、他人の不幸や涙に動かされる人は、後に自ら後悔するやうなことをしばしばしている」 (Eth.IV.50Sch.)。

では、いったいどうしてこのような見方が成立するのでしょうか。スピノザが「理性」の視点に立っているからです。実際、「理性」があれば「憐れみ」は無用であるとスピノザは主張しています。「理性の導きによって生きる人間においては、憐れみはそれ自体として悪であり、無用である」 (Eth.IV.50Pr.)。スピノザの考えでは、「憐れみ」という「受動感情」ではなく「理性」にもとづいて他者の援助がおこなわれるべきなのです (Eth.II.9Sch.)。というのも、まさしく「理性」から他者を援助する欲望が生み出されると考えられるからです。ちなみに現代の心理学者ポール・ブルームが同じことをいっています (Bloom 2015)。

このように、スピノザの「反共感論」というべき思想は「理性」による他者の援助が可能であるという考えを背景にしています。したがって、「共感」に対する否定的な取扱いそのものよりも、むしろ「理性」による他者の援助という考えの可能性それ自体がまず問われなければならないでしょう。この考えは『エチカ』第三部の終わりのほうに出てきます。スピノザはこのテキストで「理性」に導かれる人間には「強さ(fortitudo)」があるといっています。さらに「強さ」は二つの欲望となつてあらわれると主張しています (Eth.III.59Sch.)。ひとつは「自己」の存在を維持しそれを楽しもうとする欲望 (animositas) です。もうひとつは、他者がその存在を維持することを援助しようとする欲望 (generositas) です。

す。これらは同一の欲望の二つの発現形態としてとらえられています。したがって、他者を援助する欲望は自己の存在を充実させる欲望でもあるということになりますね。また、この *generositas* という欲望は、「共感」のように誰か特定の人の不幸によって動かされているのではなく、もっと一般的に他者の幸福を高めようとする欲望です。以下ではこのひとまとまりの主張を具体的に検討してみます。ちなみに、*generositas* という言葉はデカルトの『情念論』にも出てきますね。フランス語の *générosité* ですが、同じ言葉です。日本語では「高邁」と訳されます。しかし、スピノザの用語としてはこの訳語は相応しくないと思われます。この点はまた後で議論することになります。

2 「コンパッション・トレーニング」

「理性」にもとづく他者の援助というスピノザの主張に含まれる問題点は以下の2点にまとめることができます。

- (1) 一般的に他者の幸福を高めようとするような欲望 (*generositas*) は存在するか。
- (2) 他者を援助する欲望は自己の存在を維持する欲望 (*animositas*) と一体となっているか。

ニューロサイエンスの実証結果を参照することによってこれらに回答することができます。一般的な観点から他者を援助するという態度は「コンパッション・トレーニング」によって養うことができるということが分かっています。この態度を支持する大脳ネットワークが存在し、またそのネットワークは「共感」を感じるときに活動するネット

ワークとは独立した機能をもっているということがすでに明らかにされています (Klimecki & Singer 2014, Klimecki et al. 2014)。また「コンパッション・トレーニング」後の実験では、他者を援助するパフォーマンスが高まるということが検証されるだけでなく、自己の存在感も充実したものになるということが被験者から報告されています。みんな次のようにいわけです。「他の人たちによくなくなって欲しいと願うことは、素晴らしい、充実した感じですよ」。「幸福の感覚が沸き起ります」。「人間が自分の内側にこういうものを作り出すと感ずることは素晴らしいと思います」 (Klimecki et al. 2012)。これと逆の場合もあります。自己の存在感を高めることに特化したトレーニング (*mindfulness meditation*) によって他者の援助を主眼としたトレーニング (*compassion meditation*) と同様の効果がえられるということが実証されています (Lim et al. 2015)。一般的な観点から他者を援助することは自己の存在感を充実させ、また自己の存在を内的に充実させることは他者への援助という欲望をもたらすということです。スピノザのいうように、これらは「強さ」の二つのあらわれだと考えてよいでしょう。ですから「強さ」によって生きるということは、自分を犠牲にして他者に尽くすのでもなく、他者を見捨てて自分を守るのでもない。むしろ自分と他者を同時に救うことです。スピノザが「理性」という硬い言葉で伝えようとしたのはこういうことではないでしょうか。そう考えれば、スピノザの主張のポイントである(1)(2)を強力に支持するような実証結果がすでに存在しているとみなすことができます。

次に考えなければならないことは、「理性」と「共感」との関係はいったいどのようなものになるのかという点です。すでにみたように、人間

は生まれつき他者に「共感」しやすく、「慈悲」によって動かされやすいというのがスピノザの考えですが、それと同時に人間がもともと持っている「共感」への傾向は「理性」によって制御できるとスピノザは主張しているからです。「理性の命令によって生きる人間は、できるかぎり憐れみにとらえられないようにしよう」とつとめる」(EthIV.50Cor.)。一見すると、「理性」による感情の制御という何ら実効性のない思想が語られているようにも感じられます。ところが、この思想もまた「コンパッション・トレーニング」の実証結果に一致しています。「コンパッション・トレーニング」によってポジティブ感情が増大すると同時にネガティブ感情が減少することや、トレーニング後には苦痛を感じるようなビデオクリップを見てもポジティブ感情が維持され、安易に「共感」を感じなくなることが知られています。特に後者の結果について、苦痛をもたらす現実を無視するのではなく、それに悪影響を受けないような感情制御のストラテジーが神経レベルで構築されているという解釈が神経科学において合意された解釈になっています (Klimecki et al. 2014)。

また、スピノザの考えによれば、「理性」による「共感」の制御には持続性が認められています。「共感」は外部からの刺激によって生じる「受動感情」であるがゆえに一時的で不安定なものであるのに対して、「理性」にもとづく欲望である *generositas* は真理の認識によって支持されているから持続的で一貫していると考えられるからです。ところがこの点についても「コンパッション・トレーニング」の実証結果があるわけです。トレーニングが終了してから一定期間を置いた後の実験でもトレーニング直後と同じ傾向が認められるということです (Klimecki et al. 2012)。

Leiberget al. 2011)。「理性」によって「共感」を制御するというスピノザの考えには実効性があるということが以上から主張できると思います。

3 相互性と贈与

これまでの内容をまとめますと、「理性」によって「他者」を援助するという行為は可能であること、また「理性」によって「共感」を制御することができるということ、以上一点を論じてきました。では「理性」はいったいどんな原理にしたがっているのでしょうか。この問いかけに答えるには、やはり『エチカ』のテキストを読み込むことが重要ですが、ニューロサイエンスの実証データを参照することがその読解に役立つはずです。

「コンパッション・トレーニング」前になされる他者援助の行動原理は「相互性」です。どういうことかという点、「コンパッション・トレーニング」前にはかつて自分を援助してくれた人に援助する傾向が強いわけです。しかし、「コンパッション・トレーニング」後は違います。その援助はまったくの「よそ者 (stranger)」にまで及ぶということが明らかになっています (Leiberg et al. 2011; Hutcherson et al. 2008)。

「相互性」という行動原理を脅かすのは「フリーライダー」の存在であるといわれています。したがって、「相互性」を維持するには「フリーライダー」を罰する必要があるわけです。実際、「フリーライダー」を罰することによって「相互性」にもとづく行為の実施率が高まるということが実証されています。比較的大きな規模の集団では、「相互性」にもとづ

く協力行動が時間とともに減少し、フリーライダーが増加するということが知られていますが、フリーライダーに対する罰を実施すると、その時点からフリーライダーが減少していくばかりでなく、いったん減少傾向を示した協力行動が回復し、もともとの水準を超える地点まで増加するという驚くべきことが起こるわけです (Fehr & Gächter 2000, Fehr & Fischbacher 2004)。

これに関連して興味深い実証結果があります。「フリーライダー」を罰することは人間にとって「快」であるということを示したものです。報酬を得るときに活性化する大脳ネットワークが「フリーライダー」を罰するときにも活性化していることが分かっています (Singer & Steinberg 2009)。でもどうして「快」が発生するのでしょうか。「フリーライダー」に対する憎しみがあるからですね。したがって、「相互性」という行動原理はじつは他者への憎しみによって維持されていると考えられるわけです。この観点から『エチカ』をみると、スピノザにも同じ考えが発見できます。

スピノザによれば、人間は「受動」である限りで「対立的」である (Eth. IV 34 Pr.)。ちょっと分かりにくい定理です。ところが、「受動」である限りでの感情から「相互性」がもたらされると考えればこの定理の意味はきわめて明確に理解することができます。例えば、人間は自分が愛する相手には「愛し返し」を要求するということを証明した定理があります (Eth. III 33 Pr.)。贈与に対する返礼の要求ですね。これが「相互性」です。ところが相手がこの要求に応じなければ、その相手を憎み、罰したくなるでしょう。

これに対し、「理性」にしたがう人間は「能動」であり、その限りで「一致」

するという定理があります (Eth. IV 35 Pr.)。この定理も分かりにくい定理です。しかし、「理性」にしたがう人間は「相互性」とは異なる行動原理を持っているということは分かりますね。この点を指摘している研究がすでにあります (Nadler 2014)。実際、「相互性」にもとづく行動原理と「理性」にもとづく行動原理をスピノザは対立させているわけです。「理性的な人間は無知な人間の親切を避ける」 (Eth. IV 70 Pr.) という定理です。親切を受け取ることによって返礼の義務が生じますが、これは「相互性」の論理です。理性的な人間がそれを避けることができるのは、「相互性」とは異なる行動原理をもっているからです。

では、「理性」の行動原理とはいったいどのような行動原理なのでしょうか。「理性」にしたがう人間は「自分のために求める善を他の人のためにも欲する」 (Eth. IV 37 Pr.) という定理があります。この定理は重要です。なぜならここに「贈与」という考えを読みとることができるからです。それは返礼を要求するような「贈与」ではなく、まったく無償でなされる純粹な「贈与」であると考えられます。これが「理性」の行動原理ではないでしょうか。最後にこの点を考えておきたいと思います。

その前に、用語法について若干の注釈をつけ加えておきたいと思います。前に出てきた *generositas* の訳語についてです。「贈与」という観点からすると、「理性」にもとづいて他者に援助する欲望である *generositas* はスピノザの用語としては「寛大」と訳されるべきであると思います (岩波文庫では「寛仁」です)。「寛大」とは「気前がよい」あるいは「無欲」という意味です。 *generosus* とはもともと「生まれがよい」「育ちがよい」という意味で、17世紀のフランス語 *générosité* もそういう意味で使われていました。デカルトも『情念論』では

generosité という言葉を使用する際にこの意味を踏まえたと述べているので間違いないですね (Descartes 1989 : 1074)。転じて現代語では「気がよい」という意味になっているようです。例えばマルセル・モースは『贈与論』で「ポトラッチ」を論じる際にこの意味で generosité を使用しています (Mauss 1997: 262-263)。スピノザの generositas にはこのような現代的な意味を先取りしているようなところがあると考えられます。その意味で「高邁」ではなく「寛大」と訳するのが適切ではないかと考えられます。

4 神への愛

「理性」の行動原理は「贈与」であるという理解に立つて解釈を進めてみます。すると、「贈与」という行動原理の根拠となる思想とはいったい何かという問いかけが生まれてきます。端的にいいますと、それは「神の認識」ということになると思います。すでに指摘したとおり、「贈与」の論理は「自分のために求める善を他の人のためにも欲する」と表現されていますが、この論理にはじつは神の認識が含まれているからです。「徳にしたがう各々の人は、自分に求める善を他の人間たちにもまた欲するであろう。そして各々の人間はより大きな神の認識を持つことでますます多くそれを欲するであろう」 (Eth. IV.37.Pr.) という定理です。では「神の認識」からいったいどうして「贈与」が出てくるのでしょうか。ひとことでいえば、「神の認識」とは「神への愛」だからです。人間と神とのあいだには「相互性」の論理は成立しません。人間に対する愛はもしそれが報われなければ憎しみに転化しますが、「神への愛」はそう

ではないからです。「神に対する愛は憎しみに転化することはできない」 (Eth. V.18.Cor.)。それなら、「神への愛」とはいったい何なのでしょう。それは「神が自己自身を愛する無限の愛の一部分」 (Eth. V.36.Dem.) であることが証明されています。この愛は特に「神への知的愛」 (Eth. V.36.Dem.) と呼ばれるものです。スピノザの形而上学においては、すべての存在は神という「実体」の「変容」であり、したがってまた人間も「変容」ですから、人間が神を愛するということはじつは神が自己自身を愛することの一部分だということになります。自分自身を愛しているわけですから、愛に対する返礼も何もないわけです。また、この愛は神という「実体」の「変容」すべてに及んでいるはずですから、人間はこの愛に参与することでじつは自己自身を愛すると同時に自分以外の人間も愛することになります。

このように、返礼を要求しない無償の「贈与」という行動原理は「神への愛」によってもたらされていると考えることができます。「理性」による他者の援助をただたんに認知的な次元でなされるものとして理解しようとするような解釈 (Della Rocca 2004) がありますが、以上述べたことから判断すると、そういう解釈では不十分であるということが分かりますね。他者に対する援助の根底には「愛」がなければならなりません。

* ベルクソンの哲学がスピノザにもっとも接近したのは『道徳と宗教の二源泉』においてであると思います。ベルクソンのいう「閉じた道徳」とは「相互性」の原理にもとづく責務のシステムです。これに対し「開いた道徳」が提案されますが、それは「すべての人間に対する神の愛」 (Bergson 1984:1173) にもとづくこののです。ベルクソンは神秘主義者の「愛」についてこう述べています。「彼は神をとおして、神によって、神的な愛で全人類を愛する」 (Bergson 1984:1173)

いからです。「理性」というクールなものと「愛」というホットなものは、ある意味では対立するものですが、それらをひとつにまとめる論理を構築した点にスピノザの哲学の特徴を認めることができます。現代のニューロサイエンスによって徐々に明らかになりつつある人間精神の内的な力について、スピノザは形而上学という思考形態を駆使して考えていたわけですから。

おわりに

それでは「共感」にもとづいて他者を援助するという行為はどうなるのでしょうか。この問題がまだ残っています。そこで、これに回答することをおして、以上の考察を倫理的な次元でまとめておきたいと思います。「共感」にもとづく他者の援助は廃棄されるべきなのではないでしょうか。例えば、傷ついた子どもを可哀想に感じて助けてあげるとは間違っているのでしょうか。スピノザはそうは考えていません。むしろ、「共感」によって他者に援助することは人間として当然のことであると考えていたと思います。この解釈はべつにいままでの解釈と矛盾していません。人間には生まれつき「共感」という能力があり、それによって他者に援助することができるようになっていきます。スピノザはこの点を事実として認めた上で、「理性」によって同じことをすることができるといっているだけですね。「われわれは受動である感情によって決定されるすべての活動に、その感情なしに理性によって決定されることができ」(Eth. IV.39Pr.)。しかしそれだけではありません。「共感」という能力によって他者を援助することができない人間には問題があるとスピノ

ザはいつています。そういう人間をスピノザは「非人間」と断じます(PP. IV.50Sch.)。スピノザが考えていたのはおそらく「サイコパス」のことです。実際、「共感」の欠如は「サイコパス」診断の重要な規準のひとつです(Blair et al. 2005)。人間が人間に危害を加えるビデオクリップを見て活性化する大脳ネットワークが「サイコパス」においては活性化しないことが実証されているからです(Decety&Cowell 2014)。

このように、スピノザは「共感」を否定していません。人間の道徳が事実として「共感」をもとに出来上がっているということは否定できませんから。たしかに、スピノザが「共感」についてかなり否定的なトーンで語っているテキストがあります。それはすでに引用しました。しかし最終的にはその存在意義を認めているわけです。結局、スピノザがやろうとしたことは、「共感」による道徳を認めた上で、それよりもすぐれた生を提案することだったと考えられます。

凡例

『エチカ』(Ethica: Eth.) の参照箇所は以下の略号を用いて本文中に挿入する。

定理: Pr. 証明: Dem. 系: Cor. 注解: Sch.

使用テキスト: Gebhardt(ed.) 1972, *Spinoza Opera II*, Heidelberg

文献

- ・ Bergson, Henri 1984, *Œuvres*, Édition du Centenaire, PUF
- ・ Blair, R.J.R. 1995, "A Cognitive Developmental Approach to Morality:

- Investigating the Psychopath." *Cognition* 57, 1-29
- ・ Blair, James, Mitchell, Derek, Blair, Karina 2005, *The Psychopath: Emotion and The Brain*, Blackwell
 - ・ Bloom, Paul 2016, *Against Empathy: The Case for Rational Compassion*, The Bodley Head
 - ・ Della Rocca, Michael 2004, "Egoism and the Imitation of Affects in Spinoza," Yovel&Segal ed. *Ethica IV: Spinoza on Reason and the "Free Man"*, Little Room Press, 123-143
 - ・ Decety, Jean & Cowell, Jason M. 2014, "The Complex Relation between Morality and Empathy." *Trends in Cognitive Sciences* vol.18 no.7, 337-339
 - ・ Descartes 1989, Alquié(ed.) *Œuvres Philosophiques III*, Classiques Garnier
 - ・ De Vignement, Frederique & Singer, Tania 2006, "The Empathic Brain: how, when and why?" *Trends in Cognitive Sciences* vol.10 no.10, 435-441
 - ・ Fehr, Ernst, Gächter, Simon 2000, "Cooperation and Punishment in Public Goods Experiments," *The American Economic Review* vol.90 no.4, 980-994
 - ・ Fehr, Ernst, Fischbacher, Urs 2004, "Social Norms and Human Cooperation," *Trends in Cognitive Sciences* vol.8 no.4, 185-190
 - ・ Gallese, Vittorio 2002, "The Roots of Empathy: The Shared Manifold Hypothesis and the Neural Basis of Intersubjectivity," *Psychopathology* 36, 171-180
 - ・ Hutcheson, Cendri A., Seppala Emma M., Gross Lames J. 2008, "Loving-Kindness Meditation Increases Social Connectedness," *Emotion* vol.8 no.5, 720-724
 - ・ Klimecki, Olga M., Leiberg, Susanne, Lamm, Claus, Singer, Tania 2012, "Functional Neuronal Plasticity and Associated Changes in Positive Affect after Compassion Training," *Cerebral Cortex*, 1-10
 - ・ Klimecki, Olga M., Leiberg, Susanne, Ricard, Matthieu, Singer, Tania 2014, "Differential Pattern of Functional Brain Plasticity after Compassion and Empathy Training," *SCAN* 9, 873-879
 - ・ Leiberg, Susanne, Klimecki, Olga, Singer, Tania 2011, "Short-Term Compassion Training Increases Prosocial Behavior in a Newly Developed Prosocial Game," *PLoS ONE* vol.6 Iss.3, 1-10
 - ・ Lim, Daniel, Condon, Paul, DeSteno, David 2015, "Mindfulness and Compassion: An Examination of Mechanism and Social Ability," *PLoS ONE* 10(2), 1-8
 - ・ Maibom, Heidi ed. 2014, *Empathy and Morality*, Oxford, 41-56
 - ・ Mauss, Marcel 1997, *Sociologie et Anthropologie*, PUF
 - ・ Nadler, Steven 2014, "The Lives of Others: Spinoza on Benevolence as a Rational Virtue," Kisner&Younp (eds.) *Essays on Spinoza's Ethical Theory*, Oxford
 - ・ Singer, Tania & Steinbeis, Nikolaus 2009, "Differential Roles of Fairness- and Compassion- Based Motivations for Cooperation, Defection, and Punishment," *Annals of New York Academy of Sciences* 1167, 41-50
 - ・ Singer, Tania & Lamm, Claus 2009, "The Social Neuroscience of Empathy," *Annals of New York Academy of Sciences* 1156, 81-96
 - ・ Singer, Tania & Klimecki, Olga M. 2014, "Empathy and Compassion," *Current Biology* vol.24 no.18